

「 私たちも父の家へ 」

ルカによる福音書 15章 1節～3節
11節b～32節

説 教 須田 拓牧師 (東京神学大学准教授/橋本教会)

放蕩息子の話は、悔い改めの話としてよく知られています。財産の分け前をもらって遠く離れた地で放蕩の限りを尽くした息子が、そこで悔い改め、父の家に帰ってきたところ、父は帰ってきた息子を見るなり駆け寄り、喜んで、祝宴を開いたという話です。しかしこれは、主イエス・キリストが、神とはどのようなお方であるのかを教えるためにお語りになったたとえ話です。

この放蕩息子は明らかに、1～3節で主が食事を共にしていた徴税人や罪人と呼ばれる人たちのことが意識されています。彼らは当時、神を畏れない者として人々から嫌われ、最も救われ難い者と見なされていました。しかし私たちこそ救われ難い者ではないのでしょうか。神の恵みなくしては生きて行くことすらできないはずなのに、私たちの心は日々神から離れ、神から与えられている賜物を、神や隣人たちのために用いるのではなく、無駄遣いしているのではないかと思わされます。しかもその自分を自分ではどうにもできません。まさに救われ難い者であり、放蕩息子そのものであると思わされます。しかし主は、その私たちをあの子のように愛し、帰ってくれば喜んで必ず受け入れてくださるお方があると言われるのです。

それにしても、あの放蕩息子はあれだけのことをしておきながら、その責任を何も問われないのはおかしいと思われるかもしれませんが。しかしこの話をされたお方は、何よりも、十字架にかかるためにこの世に来られました。それは、このあり得ないような話を実現するためです。神は決して、放蕩の限りを尽くす私たちのどうしようもない部分を見て見ぬふりをしておられるのではなく、神はそのような私たちの有様を、ご自分の独り子に負わせるほどに真剣に扱い、その上で、心配せずに戻ってきなさいと仰るのです。逆に言えば、父なる神は、このあり得ないように思われる話を実現するために、御子を十字架で犠牲にすることまでされるお方だということなのです。

しかし私たちはあの放蕩息子と違って、父の許に帰ろうとすらしらないし、どこに戻ればよいのかすらわからない者ではないかとも思います。

そこで、この話の前の4～10節に、百匹の羊の中から迷い出した一匹を必死になって探す羊飼いの話、そして落とし一枚の銀貨を隅から隅まで必死に探す女の話という、「探す」話があることが重要です。実際、主は天に帰られた後、聖霊を送って、そのような私たちを探し出してくださいだったのでないでしょうか。聖霊は、どこに戻ればよいのかすらわからなくなっている私たちを探し出し、信仰を与えてキリストの方を向かせ、神の許へと連れて行きます。神はこの放蕩息子の話が現実にかかるように、ただ待っておられるのではなく、ご自分から探して連れてくることまでなさるのです。

私たちは知らず知らずのうちにこの物語の主人公にされているのかもしれませんが。それは究極的には洗礼式において起こります。迷っていた者がキリストにしっかりと結ばれ、よく帰ってきたと歓迎されます。それも、神の子とされ、まさにあの息子と同じ立場にされるのです。しかし、この礼拝の場で神に心を向け礼拝していることも、私たちが聖霊によって見つけ出されてきたことを意味していると言ってよいでしょう。もちろん、私たちは一度連れ返されても、また心が離れてしまう者かもしれませんが。けれども神は門の前にまで出て、その私たちを「いつでも帰ってお出で」と呼んで待っていてくださり、帰ってくれば喜んでくださるとこの朝改めて聞いているのです。

私たちには、いつどんな時にも帰ることのできる場所があります。どんな時でも、普通であればとても顔向けできないと思うような時にも、「いつでも戻ってお出で」と言われる、十字架の掲げられた場を持っています。私たちは今日、その場所に帰ってきました。教会、あるいは礼拝の場には、あの父親が放蕩息子のために開いたように、私たちを歓迎する祝宴があります。既に洗礼を受け、本当に「子」とされた方には、月に一度の聖餐の食卓があります。そうでなくとも、毎週の礼拝は、聖書の御言葉を通して神の招きと愛の声とで満ちており、神は私たちがここに帰ってきたことを歓迎して下さいます。だからこそここには歌声があり、喜びの音色が響き渡るのです。そしてここに帰ってくることに、それこそが悔い改めであるのです。

(記 須田 拓)